

Special Interview



指揮者
大植英次
Eiji Oue

ベートーヴェンが信念を貫いた

「第九」の世界観を届けたい

毎年好評を博している「KEIBUN第九」。今年はドイツ在住の指揮者・大植英次さんが4年ぶりにタクトを振ります。溢れるエネルギーで聴衆を引き込む大植さんの世界観に魅了されること間違いなし。第九への熱い思いを語っていただきました。

PROFILE

大阪フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー名誉指揮者。タンゲルウツド音楽祭でレナード・バースタインと出会い、以後助手を務める。これまでにバッファロー・フィル準指揮者、エリー・フィル音楽監督、ミネソタ管音楽監督、バルセロナ管音楽監督、ハノーファー北ドイツ放送フィル首席指揮者、大阪フィル音楽監督を務め、ハノーファー音楽大学の終身正教授も務めている。2005年、「トリストランとイゾルデ」で日本人指揮者として初めてバイロイト音楽祭で指揮し、世界の注目を集めた。

ベートーヴェンを研究し彼の音楽を深く追求

「第九の中でも第4楽章に登場する「歓喜の歌」は、親しみやすく日本人にとっても馴染みの曲。ヨーロッパでは「欧州の歌」として式典などで演奏されている。しかし、大植さんの研究によるとベートーヴェンが作曲した当初は「童謡みたいでダメだ」と周囲からの評判は悪かったという。

「第九は彼が54歳の時に作っているのですが、「歓喜の歌」のメロディーはわずか12歳の頃に書いたものと言われています。きっと、このメロディーは彼の中にずっと残っていたのでしょう。大批判されても、絶対に使うと信念を貫いたのです」と大植さん。この頃のベートーヴェンは耳が聞こえない中、当時発明されたばかりのメトロノームを使って曲を書いた

たそうだ。交響曲第8番を作ってから数年間本格的な作曲活動を休止した後、「第九」が生まれている。

大植さんはベートーヴェン直筆の第九の楽譜の写本など数々の資料を所有。それらを読み込んで作曲家が表現したかった音楽を追い求める。

「師であるレナード・バースタイン先生と行動を共にしていた35歳の時、教えを乞おうとウィーン在住の、ベートーヴェン研究家を訪ねたことがあります。しかし、その方からは「50歳になったらまた来なさい」と。それまで勉強するように言われ、50歳の時に再訪。長年収集されたベートーヴェンの資料をいただき2人で話し込みました。ベートーヴェンのバックグラウンドを研究し、彼の音楽を追求する姿勢は今も変わりません」



©飯島隆

一人ひとりの合唱団員と真剣勝負で音楽を作る

一人ひとりの合唱団員と

KEIBUN第九の合唱団員は中学生以上を対象に公募し、夏から16回もの練習を重ねて本番を迎える。大植さん指揮のもと、オーケストラと約300人の団員のハーモニーが一つになる。

「僕は一人ひとりの団員と必ず目を合わせて指揮します。人数が多くなるほど個々の

責任は大きくなり、それぞれが歌い込むことで聴衆の心に音楽が伝わります。ドイツ語の言葉の響きや深み、ベートーヴェンの想いをもんなと共有できるようにするのが僕の役目。バースタイン先生が子ども相手にも大人に講義するのと同じ教え方をしたように、私も団員の年齢に関係なく真剣勝負で挑みます」

第九の前に演奏するのは、ワーグナーの楽劇「神々の黄昏」より、ジークフリートの葬送行進曲。「第九に合う高尚なプログラムにしようと思ひました。演奏会の格調は高く、でもハードルは低く、お客さまに気軽に来てもらうのが僕のモットーです」。大植さんはワーグナーが自作の楽劇を上演するため創設した「バイロイト音楽祭」で初の日本人指揮者として出演している。

「第九ではベートーヴェンの世界観を感じていただき、幸せな気持ちを持ち帰ってもらいたい。そして、4年前より成長した大植英次をお見せしたいと思ひます」



友の会優先申込につづき、9月1日(土)より一般発売開始!お席のリザーブはお早めに

7067 **KEIBUN第九2018** 12/15 sat 17:00開演

会場:滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 大ホール

料金:SS席6,500円 S席6,000円 A席5,500円 B席4,500円 C席3,500円 ※C席は電話受付のみ

指揮:大植英次(大阪フィル桂冠指揮者) 管弦楽:大阪フィルハーモニー交響楽団

独唱:田崎尚美(ソプラノ)、富岡明子(アルト)、鈴木准(テノール)、原田圭(バリトン)

合唱:KEIBUN第九合唱団(合唱指揮:大谷圭介)

曲目:ワーグナー/楽劇「神々の黄昏」より ジークフリートの葬送行進曲、ベートーヴェン/交響曲第9番「合唱付」



田崎尚美

富岡明子

鈴木准

原田圭